

## 2026年2月8日 説教「自分を低くする」

ルカの福音書 14 章 1～11 節

先週は 13 章終わりの部分から、主を主とすることについて考えました。旧約の民もイエスの時代の人々も、主をないがしろにしていました。そのようなときに、「主の御名によって来られる方に祝福あれ」と賛美していくことが、主と出会う道であることを学んだことでした。今朝から 14 章に入っていきます。

### 1. 安息日の癒し (1～6 節)

- ①イエスに注目する人々 (1～2) 「ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家に入られたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。そこには、イエスの真正面に、水腫をわずらっている人がいた。」

ある安息日のことです。イエス・キリストは食事をしようとして、パリサイ人の指導者の家に入ったのです。すると、皆はじっとイエスに注目していました。というのも、イエスの目の前には水腫を患っている人がいたからです。水腫は心臓病か腎臓病のゆえに体中に浮腫みが生じる病気でした。

- ②イエスの質問と癒し (3～4) 「イエスは律法の専門家、パリサイ人たちに、『安息日に病気を直すことは正しいことですか、それともよくないことですか。』と言われた。しかし、彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いていやし、帰された。」

イエスは周囲にいた、律法の専門家やパリサイ人の疑問に対して、機先を制するように、質問されました。それは、安息日に病気を直すことは正しいかどうかという問いでした。これまでも、主は安息日にシモンの姑 (4:38)、手のなえた男 (6:6)、18 年間腰が曲がった女性 (13:12) をいやしてこられました。イエスの問いに対し、彼らは黙っていました。良いといえれば安息日違反を容認することになり、だめだと言えば苦しむ同胞を見放すことになるからです。主イエスはその人を抱いて癒され、帰されたのでした。

- ③息子が井戸に落ちたら (5～6) 「それから、彼らに言われた。『自分の息子が牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといいつて、すぐに引き上げてやらない者があなたがたのうちにいるのでしょうか。』彼らは答えることができなかった。」

そして強烈なメッセージを述べられました。安息日に、自分の息子や牛が井戸に落ちたとうすれば、すぐに引き上げないのですか。それは 13 章に出された、安息日にも牛やろばに水を飲ませる (15 節) というたとえの状況に自分たちの息子という具体例が挙げられ、反論のしようもありませんでした。パリサイ人からすれば痛い所をせめられたこととなります。

### 2. 招かれた時にどの席に座るか (7～9 節)

- ①上座を選ぶ人々 (7) 「招かれた人々が上座を選んで座っている様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえで話された。」

さて、イエスは別のことに目を向けられます。それは、その場所に招かれた人々の座席へのこだわりでした。つまり、招かれた人々が競って上座を選

んでいるのです。そこで、主はたとえを話されました。

- ②披露宴のたとえ話 (8) 『**婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、**

たとえの設定は結婚披露宴です。そこに招かれたとしたら、上座に座ってはいけないという話でした。話を聞いている人々は、直接的に戒めを受けたような気持ちだったでしょう。ただ、たとえのなかでの理由はこうでした。その婚礼に身分の高い人が参列していたとすればどうするのですかと、たとえを用いて問われているのです。

- ③席を譲ることになったら (9) 『**あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください。』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかいて、末席につかなければならないでしょう。』**

人が上座に座しているところに、披露宴の招待主が来て、身分の高い人に上座を譲ってくださいと言われたら、あなたは末席に退かされてしまい、大恥をかくことになるでしょうと、上座に争ってとることの愚かしさを、示されています。

### 3. 高い心、低い心 (10~11 節)

- ①末席につきなさい (10) 『**招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください』と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すことになります。』**

そこで、もし披露宴に招かれるようなことがあれば、最初から末席に着きなさい。そうするならば、仮にあなたがもう少し上席に座るほうがふさわしいと、招待主が判断すれば、やって来て、上席を勧めることになるでしょう。もし、そのようになるならば、あなたは皆の前で面目を施すことになるのです、というたとえ話を通しての勧めでありました

- ②自分を高くするか低くするか (11) 『**なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』**

そして、言われました。「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです」と。箴言 29 章 23 節に「人の高ぶりはその人を低くし、へりくだった人は誉れをつかむ」とあります。これらは、神を覚えることが前提となっていて、高ぶる者は主なる神から評価を低くされ、身を低くする者は、主なる神からの評価をいただくという教えなのです。

### 《展開と結論》

水腫を患った人の癒しについては、身につまされました。ちょうど三年前、私の場合は免疫の不全により、腎臓や肝臓に症状が出て、全身が浮腫み、体重が 7~8 キロも増えることになってしまったのです。要するに液状成分が体のあちらこちらに異常に滞留し浮腫みが生じてしまったのです。今日

の医学ですから、相当のステロイドが使われて症状は抑えられ、その他の治療もあって、一か月ほどで退院することができました。今日の医学を用いて、主が癒してくださったと信じています。感謝です。

ここに出てきた水腫の男の場合も、体中が浮腫み、いかんともしがたい状態であったと思います。時に安息日でした。律法によるならば、イエスの癒しをいただくことは難しいのです。しかし、主イエスはパリサイ人や律法の専門家を前にしながら、彼らに問いかけ、安息日に井戸に落ちた息子や牛のことなどの説明をした上で、一定の納得をもたらし、この男を癒されたのでした。まさに、癒し主にハレルヤです。

その食事の場において、イエス・キリストが語られたことは、その座にいた人々にも片腹痛いことでした。上座を争う人々に、たとえを挙げながら、自分を低くする心をお教えくださいました。もっとも、この記事を一読した日本の民は、そんなことは聖書から教えられなくても実行していると、心のうちで思うかもしれませんが、しかし、ここでイエスが教えようとされているのは、ただ外見において末席を選ぶというテーブルマナーや人生訓ではありません。真の意味での謙遜の道を示しておられるのです。そうでなければ、それは中身のない謙遜になってしまいます。

箴言の中には 29 章 13 節以外にも、14 章 12~14 節、25 章 6, 7 節などに身を低くすることが教えられています。また、新約聖書にはヤコブの手紙 4 章 6 節には「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える」とあり、ペテロの手紙第一 5 章 5 節以下にも謙遜が教えられ、6 節には「ですから、あなたがたは神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神はちょうど良い時に、あなたがたを高く上げてくださいます。」とあります。

アンドリュー・マーレイ牧師 (1827~1917) の「謙遜」という書は珠玉の言葉が並んでいますが、その一節にこうあります。「謙遜、それは自我の終わり、自我の死に他ならないものです。それは、イエスがされたように、すべての人間的名誉を放棄し、神のみから来る誉れを求めます。」と記していますが、まさにイエス・キリストこそ謙遜についての最高の模範です。ピリピ人への手紙 2 章には「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい」(2 節)と教えられ、キリストこそその見本であることが示されます。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまで従われました。」(6~8 節)とあります。神である方が人間の姿をとって歩んでくださったのです。これ以上の謙遜があるでしょうか。私たちは究極の謙遜の方を主として歩んでいるのです。もはや、座席の上下などのことではなく、身を低くして歩むことが、クリスチャンの道であることを私たちは学ばなくてはならないのです。謙遜はクリスチャンがいただく重要な品性です。主イエスから真に自分を低くすることを教えていただき、この週も歩いていきましょう。